

2008年3月31日発行

北海道情報大学 学内報

発行：北海道情報大学

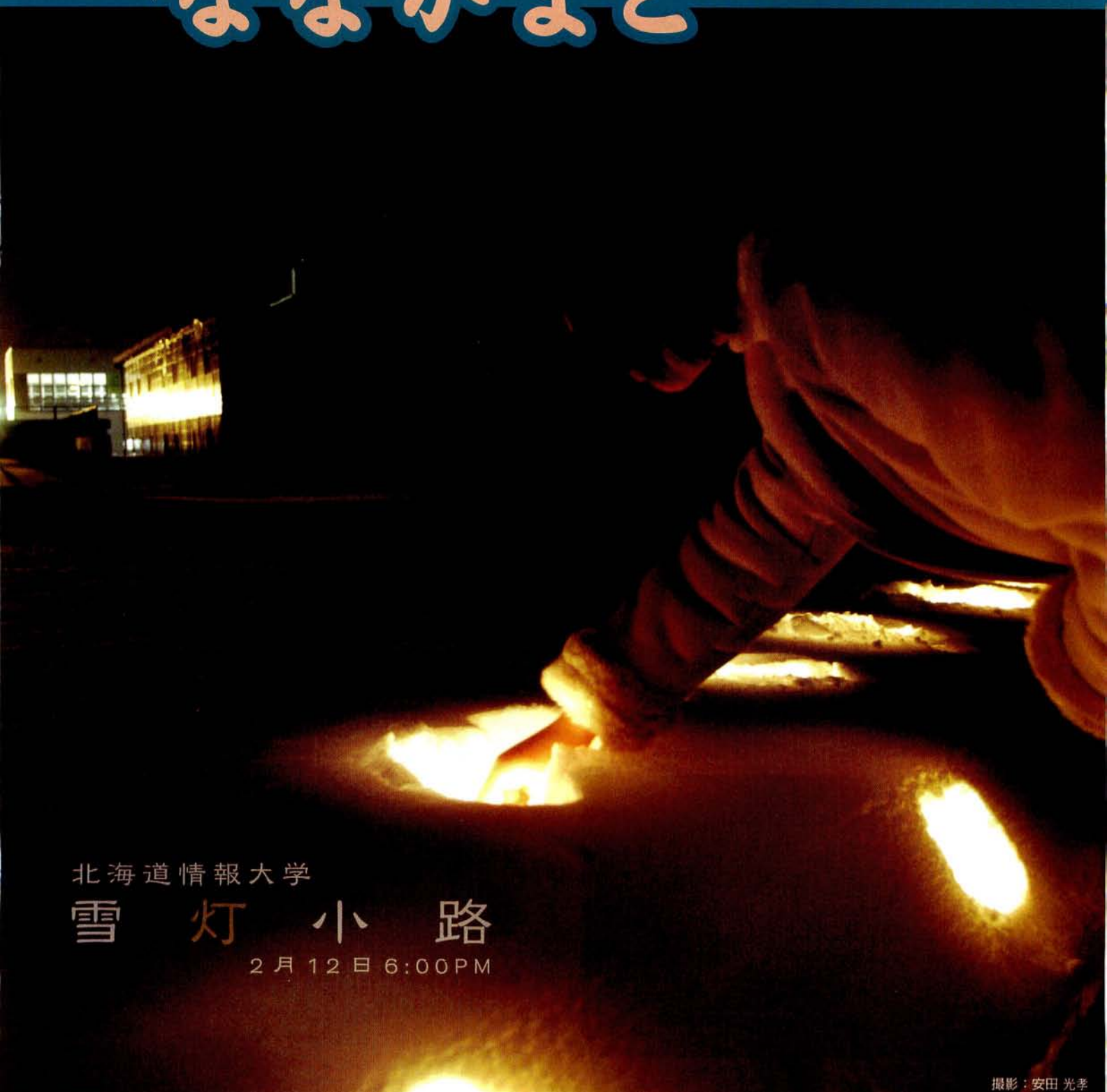
〒069-8585

江別市西野幌59-2

TEL 011-385-4411

FAX 011-384-0134

ななかまど Vol.42



北海道情報大学

雪灯小路

2月12日 6:00PM

撮影：安田 光季

目次

■学位記授与式挙行.....02	■CMコンテスト.....15
■学位記授与式学長訓辞.....03	■雪灯小路.....16
■退職教員あいさつ.....04	■東大大学院合格報告.....17
■現代G Pフォーラム開催.....07	■海外研修報告.....18
■企業向け大学説明会を実施.....08	■イベントスノーフェスタ.....20
■北海道映像コンクールで入賞.....09	■就職活動を振り返って.....21
■「きぼう」プロジェクト始動!!.....10	■洋上研修報告.....22
■第7回Webデザインコンテスト.....12	■学生相談室について.....23
■豚井.COMに掲載.....13	■ゼミ紹介.....24
■プログラミングコンテスト実施.....14	■クラブ紹介.....25
■TOEFL実施会場に.....14	■平成19年度公開講座終了報告.....26
■ビジネスプレゼンテーションコンテスト.....15	■主要行事・編集後記.....28



平成19年度 学位記授与式

3月14日(金)午前10時から、
 本学松尾記念館講堂において、
 平成19年度北海道情報大学学
 位記授与式が行われました。

経営情報学部第16回、情報
 メディア学部第4回、通信教
 育部第11回、大学院第11回の
 合同で行われた式の模様は、
 会場に設置されたテレビカメ
 ラ4台により、全国の各教育
 センターにも中継されました。

今年度からは、式場には保
 護者席を設けるとともに、式
 の中では賞状授与として、成
 績優秀者等の学生表彰を行い、厳粛なうちにも和
 やかな雰囲気の中行われました。その後、卒業
 記念写真撮影、学科等別学位記授与、体育館での
 卒業祝賀会と続き、学位記を手にした卒業生・修
 了生たちは、大学との別れを惜しんでいました。



祝辞を述べる松尾理事長



各学科等の代表に学位記を授与



学生表彰の賞状と盾



●卒業生

- ・経営情報学部
 - 経営学科・経営ネットワーク学科 71名
 - 情報学科・システム情報学科 82名
- ・情報メディア学部
 - 情報メディア学科 146名
- ・経営情報学部 通信教育部
 - 経営学科・経営ネットワーク学科 45名
 - 情報学科・システム情報学科 324名

●修了生

- ・経営情報学研究科 14名
 (総務課)

平成19年度学位記授与式学長訓辞



学長 嘉数 侑昇

卒業生、修了生の皆さん、今年、平成20年は本学、北海道情報大学の創立、20周年にあたる記念すべき年であり、この記念すべき年の、弥生3月、今日の良き日に、皆さんが、晴れて、学士、修士の学位を、取得されましたこと、心からうれしくおもいます。

本日は、皆さんがこれまでの20年弱の長い期間にわたって、教育を受けてきた時代から、ようやく開放され、実社会へと、新しく羽ばたく時でもあります。この間、本学の学生である、皆さんを、精神的、経済的に、暖かく支えてこられたご家族の皆様、学長として深く感謝の意を表します。ありがとうございました。そして、おめでとうございます。

さて、これから、皆さん自身による、自分が創る、自分のための世界、時代への、新たな旅立ちが始まります。

ところで、旅立ちといえば、3月11日に、日本宇宙航空開発研究機構、JAXAの宇宙での実験棟組み立てミッション、「きぼう実験棟」を搭載した、スペースシャトル・エンデバー号が打ち上げられ、皆さんより一足早く、未来、宇宙へ出発しました。

なお、本学の情報メディア学科教員、学生チーム「きぼうプロジェクト」によって作成された、打ち上げの、カウントダウンフラッシュを、JAXAの公式サイトで見ることが出来ます。ぜひご覧ください。

近頃、地上は、暗いニュースに満ちています。しかし、空を見上げてご覧下さい。まさに、今、皆さんの頭上、宇宙空間で実験棟が組み立てられているのです。皆さんは、21世紀宇宙時代の地球市民なのです。足元だけではなく空を見上げてごらん、です。

これまでの、人類の歴史は、未知なるものを知りたい、という、夢、強い衝動、イメージ、あるいは、希望を、実現するための、継続的な努力の歴史です。

スペースシャトル・エンデバー号は、南太平洋を探検した、キャプテン・クックの、第一回目の航海帆船の名前；エンデバー号、から取られました。エンデバーとは、そのものずばり、「努力」を意味します。クックも未知なる世界を知りたい、探検したいという夢を、実現すべく努力したのです。

空も海と同様です。いまや誰でもジャンボジェット機で空を飛んでいます。『星の王子様』の「サン・テグジュベリ」の「夜間飛行」には、安全な航空路開拓の夢を、実現するために、先人たちがいかに努力したかが生々しく書かれています。ぜひお読みください。宇宙での基地建造の実現も、元をたせば、宇宙を知りたいという、人類の強い希望と、その実現に向けた、持続的の成果だと思えます。

これらから、連想されますのは、世界中の多種多様な種類の、成功サンプルを収集し、分析した結果から、導かれたとされる「マーフィーの法則」です。「マーフィーの法則」は、つねに、心から、心底から、具体的に、何かになる、なりたいたいことを、強く、継続的に、イメージ、希望するならば、それが潜在意識となって、自然と努力をし、結果として、いつの日かイメージや希望が実現されると主張しています。キ

ーワードは「イメージ」と「エンデバー」です。

マーフィーに倣って、卒業式に当たり、私は皆さんに、次の三つのことを希望します。

まず、第一に、夢、ドリーム、そのイメージを持つこと：大学を卒業するに当たり、やりたい、なりたいたい、かなえたいような、夢、希望を、具体的にイメージすること。

第二に、夢実現のためのタイムリミットを設定すること：いついつまでにそれらのイメージを実現するのだという、日時、期限をセットすること、

第三に、楽天的に思考すること：何事も明るく前向きに捉えること。特に対人関係において相手の良い面にだけ目をむけ、悪い面には鈍感になること。

もしも、これらを実行することができたならば、いつの日か、必ずや皆さんの夢は現実のものとなり、希望通りの、すばらしい人生を創るが出来ることを確信しています。

若い皆さんは、これらを実行するに、十二分な能力、時間を持っています。その上に、北海道情報大学で学び修得した、21世紀の必殺武器・ITを、使いこなすことが出来るからです。

さらに付け加えるに、わが北海道情報大学は、創立20年を経て、これまでに、約90名の大学院生、4,000名の学部学生、7,100名の通信教育学部学生、合計、1万1千有余名の優秀な、人材を、世の中に送り出してまいりました。結果として一万人余の仲間がいることとなります。家族同様、同窓の仲間はかけがえのないものです。

これらを要するに、皆さんは、体力、能力、若さ、時間、武器としてのIT、そして仲間、という貴重な財産を十分に持っています。それらを資源とすれば、何事も実現可能でしょう。

あとはイメージとエンデバーです。

先ほど私は、皆さんに三つの希望を述べました。実は、同じことが、我々大学自体に、大きな夢、実現すべき課題があるのではないかと、思っております。その夢とは、来るべき、次の、10年後、平成30年には、皆さんの精神的中心であるべき北海道情報大学を、卒業生の皆さんが、本学の卒業生であることに、堂々と、誇りを持てるような、今、以上に、より立派な大学にすることです。

北海道情報大学の、具体的な夢は何か、どのような人材を育成するのか。これを具体化することは、教育の最高学府である、大学教育の現場を預かる、我々の、基本的、且つ、当然の責務であります。我々にもイメージとエンデバーです。

卒業生の皆さん、お互いの、夢、イメージの実現に向かって、ともに、エンデバー、し、ドリカム：ドリームズカムトゥルーを実現しましょう。そして、平成30年には、ハッピーな皆さんとともに、創立30周年記念、大パーティを盛大に行おうではありませんか。

ご家族の皆様、卒業、修了の皆さんに、祝意を表し、その未来が、輝けるものとなりますよう、心より祈念して、学長訓辞といたします。



退職にあたって

経営情報学部 教授 新保 勝

平成13年情報メディア学科の新設時に着任し、2年前に新設の医療情報学科へ移り、併せて7年間お世話になりました。緑豊かなキャンパスで、大学を愛し自由な発想をする教職員、活気にあふれ希望にあふれた学生達と向い合えたのは幸せでした。大学としては小規模ながら、本学OB・OGが加わって家族的な雰囲気が漂い、良かったですね。毎日人に会うのが楽しみで大学に通ったようなものです。

学生には、「大学生活が日々新鮮で、刺激的、魅力的かつ冒険に富む」（『足長おじさん』）ものであって欲しいと願ったものでした。尤も肝心の教育では、「黒板に書かれたことがすべてなら、白いチョークを一つ下さい」（NHK歌壇、2003.6.29）といった知識偏重ではなく、「演繹の規則だけを手に自力で数学の殿堂を再構築せよ」（『素数の音楽』）といった論理的な考え方や問題を発見し、解決するセンスを養うのが狙いでしたが、そうは行きませんでした。学生による授業評価ともなると低空飛行で、年代別に一番評価が低かった60代という責任の一端は免れないところです。教育のし甲斐のない学生がいるとすれば、FD（教員研修）をやっても全く効果のない教師だったということになります。それとあって、もう一度講義を受けたいと感想に書いた答案には無条件で優をつけました。

情報メディア1期生から4期生までゼミ生は42人預りました。しかし、最後の年は全員無事卒業とはいきませんでした。2期生から学位記授与式後の卒業祝賀会で貰った色紙の寄書に「おじいちゃん先生へ」とあって、

嬉しいのとガッカリ感とが交錯しました。現2年生なども個性豊かな学生が多く、元気潑刺です（それで授業中はウルサイことに！）。また、医療情報1期生も元気なこと、圧倒されます。1年生の時に2年生向けの講義をしたら、何でこんな講義が医療情報に必要なのかと学生から厳しい批判が出た一方、十分にこなす学生も随分いました。もう少し若さと元気さに余裕があれば、まだまだ対峙したい思いがあります。かくて、今際の時には学生達の名前が次から次へと口をついて出そうです（『チップス先生さようなら』のように）。是非、こういった学生全員が活躍する場としてのキャンパスが更に充実することを望みたいですね。

情報メディア学部長1年は入試関係やら自己点検報告書作りやらで会議に忙殺されたものの、入学者数が他大学では殆ど例を見ないというV字回復がなり、安堵したものでした。その後の大学院研究科長2年は大学院生が定員を超えて在籍し、それとともに院生室や研究スケジュール等で教育環境の整備がなったものの、最後は定員を下回っての引継いで、飛ぶ鳥跡を濁す結果となりました。

7年という短い期間ながら、教職員の皆様方から頂いた数々のご好意に心からお礼を申し上げ、また、本学の一層の発展を願って退職の言葉と致します。



退任にあたって

経営情報学部 教授 浪田克之介

本学に赴任しましたのは情報メディア学部が開設された平成13年4月でしたので、それから早くも7年間に経過したことになります。その間経営情報学部で、新設の医療情報学科を含む3学科すべてに所属する機会を得ましたが、学科内の改組や充実の努力を通してそれぞれの学科の特色を知ることができました。

しかしながら、教室で顔を合わせた学生諸君は「海外事情」の履修者を別とすれば、ほとんどは情報メディア学部のクラスでした。新しい大学や学部の初期の学生によく見られる意欲ある諸君と共に学ぶことができたのは楽しい経験でした。その一方で、入学者の学力の多様化に伴い、「英語Ⅰ」で習熟度別クラス編成が採用され、いわゆる"false beginners"を担当することになってややとまどったこともありました。

上述の「海外事情」は学部や年次を問わず履修できる選択科目で、南京大学に続いて学術交流協定が結ばれたアメリカのカリフォルニア大学サンタクルーズ校(UCSC)へ履修者を夏休みの期間に送り出すプログラムです。SARSの蔓延で中止に追い込まれたり、ドル高円安などもあって参加者数が一定しなかったりしましたが、プログラム内容をいっそう充実させて、今後も本学の目標の一つである国際性豊かな人材の育成に貢献してほしいものです。同じことはUCSCへ長期派遣をしている交換留学生制度の充実についてもいえます。本学での唯一の交換留学制度ですので、留学希望者の英語力また留学者への財政的支援などがしっかりして、これまで3名にとどまっている経験者の数が増えることを願っていま

す。また、中国からの留学生同様に、UCSCからもたとえ短期間であっても学生が来学するようになれば新しい機運が生まれるに違いありません。

本学の大きな特色の一つである通信教育課程に携わる機会もありましたが、とりわけ印象深かったのは、数が少ないながら一般社会人の受講生の熱心な勉学態度でした。たまたま教材にIT関係の内容が盛り込まれていたとき、一人の受講者が、今取り組んでいる仕事に関係する英語の文献では、このような表現が使われていると話してくれました。単に「英語」の単位を取得するだけではなく、この受講生にとっては英語の学習と実務が深く結びついていることをことごとくおしえてくれました。通信教育課程への社会人入学者の増加を大いに期待しています。

教養教育協議会や各種委員会では、専門の異なる先生方とともに仕事をするになりましたが、本学の規模では、この7年間のうちに教員・事務職員を問わずほとんどみなさんと顔を合わせることができました。たいへんお世話になったみなさま方に、あらためて御礼申し上げます。

大学は冬の季節に入っていると言われる昨今ですが、イギリスのロマン派詩人P.B.シェリーの言葉「冬来たりなば春遠からじ。」にありますように、みなさんのご努力で、本学は必ずや大きな発展を遂げ、高い評価を得られるものと考えています。

最後になりましたが、みなさまにはくれぐれも体に気をつけ、ご活躍くださいますように。



教わり下手でメカ音痴

経営情報学部 特任教授 藤家 壮一

本学にメディア学部が新設されると同時に、両学部の教養科目第2外国語のひとつとしてロシア語が設けられ、その担当者として招かれて7年間お世話になりました。

ロシア語はそれまでに30年以上教えてきたとはいえ、新しい大学でのほとんどすべてが未経験といってよく、教養主任の先生や第2外国語の先生方、それに教務課の方々に大変ご迷惑をおかけしました。

前の職場でもパソコンを使ってはいましたが、ロシア語と日本語を打つためのワープロ機能だけに終始していたので、学内LANに接続してメールをやり取りしたり、出欠や成績評価なども自分の研究室の端末から入力するという、生来のメカ音痴人間にとってはまさに異次元世界の難事に直面するはめになったのです。マニュアルを読んでも、日本語で書かれているのに理解不能で、結局は同僚の先生方、情報センターの職員の方々、さらにはボランティアの学生諸君の手をも煩わせるという有様でした。皆さんはとても懇切丁寧に教えてくれましたが、教わって自分で出来たかという、そうではなく、例えばさまざまなソフトのインストールといったことなどは、代わりにやってもらいました。それは単にメカ音痴というだけでなく、教師の教わり下手というのも理由だったでしょう。

40代の初めに、必要があって車の免許を取ろうとしました。当時はどの自動車学校も半年待ちが珍しくないという時代で、仕方なく、コースを借りて個人で教えている方に友人を介して頼み込んだのですが、「40過ぎて、し

かも学校の先生ではダメだ」と初めのうちは断られました。その人の曰く、「医者と教師は教えにくい」。長年の経験で得た結論だったようです。実技のときは仮免でも路上でも、絶えず隣の席から、「大学の先生はどうしてそんなに頭が悪いの」を連発され、へこみました。それ以来、教師の職業病のひとつだと自戒してきましたが、自戒というのも頼りにならないもので、よく忘れます。

赴任して数年後に大学に新しい教室棟が作られ、さまざまな最新の機器が備え付けられました。その高機能の教室を使ってオムニバス講義の一端を担うことになったのですが、IT弱者にとってはネコに小判で、使いこなせたのはワイアレスマイクだけというお粗末な結果でした。それでも、大きな教室で200人~300人を相手に講義をするということは、それまで小さな教室で、しかも肉声で授業をやってきた者には貴重な体験でした。効率や採算性という問題がクリアーできるなら、小規模・肉声という教育環境の方が望ましいとも感じました。

このたび情報大学を去るにあたって、いまの気持ちを端的に表すなら、スパシーバの一語に尽きます。ちなみにこの言葉は理事長もご存知のロシア語で、ありがたいの意味です。

現代GP 成果報告フォーラム 開催される

経営情報学部 教授 谷川 健



平成17年に採択された本学の現代GPプロジェクト「ITによるIT人材育成フレームの構築」は今年3月で終了します。3年間の成果を周知するために、平成20年3月5日に現代GP成果報告フォーラムが本学213教室で開催されました。本学教員、学生に加えて、道内外の大学教職員、企業の方、合計90名弱の参加がありました。

中居事務局長の司会でフォーラムは進められました。最初に、北海道大学大学院宮永喜一教授から、来賓の挨拶として、本学とのかかわり、本学と北海道大学のeラーニングの取組みの紹介がありました。本学現代GPのプロジェクトリーダー、富士教授から基調講演がなされました。基調講演では、北海道情報大学におけるeラーニングの取組みの経緯と変遷、本学の現代GP活動の概要、学習者適応型eラーニングの必要性とその特徴、正規授業での取組みなどが報告されました。現代GPで開発した学習者適応型eラーニングシステムPOLITEに息を吹き込みことにより、教育を変えていくことができるという提言がなされました。招待講演として、電気通信大学大学院教授でe-Learning推進センター長、国際交流推進センター長の岡本敏雄教授から、「高等教育機関におけるeラーニングの役割と課題」についての講演がありました。北海道情報大学のeラーニングの取組みの紹介の後、我国を取り巻く教育文化の問題、日本のeラーニングが置かれている技術的基盤、社会的基盤、社会的受容性などの現状の厳しさが指摘されました。それらを克服するために、将来のeラーニングの新しいアーキテクチャと今後の方向性が示されました。ITSSユーザー協会専務理事、スキルスタンダード研究所代表取締役の高橋秀典氏から、ITSSの新しいバージョン(ITスキル標準V3)の紹介があり、本学のITSSに基づくラーニングポートフォリオの改良の必要性が指摘されました。谷川と藤井教授から、演習型eラーニングの正規授業への取組みの報告と現代GPで開発したPOLITEのシステム機能と学習効果の両面からの評価結果についての報告がありました。山北准教授の司会のもと、学生の生の声の紹介がありました。経営ネットワーク学科2年生の紺谷君は、自分が受講したPOLITEの機能をわかりやすく説明し、受講した感想を述べて

いました。インタビュー映像で、6名の学生の生の声が紹介されました。先生とのコミュニケーションが欠けるのではないかという指摘もありましたが、自分のペースで理解できるまで学習できる点が良いなど、eラーニングに肯定的な意見が多くありました。教材開発に関わったシステム情報学科4年生の小田君は、どのような思いで教材を開発してきたのかを熱く語ってくれました。質疑応答では、岡本先生から、eラーニングと対面講義にはそれぞれに特徴があるので、その特徴を生かした講義が重要であることが指摘されました。富士先生から、生身の先生とのコミュニケーションを補うためにメンタリング機能を充実することが必要であるとの意見が述べられました。最後に、学長から、現代GPの成果を今後学内に普及していくことが重要であるとの指摘がなされ、フォーラムが閉じられました。

宮永、岡本両先生から、本学のeラーニングの歴史は長く順調に育まれてきており、今回の現代GPはその集大成の一つになっていることが紹介されました。本学のeラーニングへの関わりは、本学の教職員が意識している以上に外部から評価されていることを実感しました。しかし、富士先生が指摘されたように、本学にはeラーニングによって教育を変えるという戦略やマネジメントが不足しているという現状があります。学長が述べられた「このプロジェクトの成果は成長した学生である」という成果を今後も出し続けるためには、小田君が最後に言っていた「本プロジェクトの継続」が必要条件になるでしょう。継続するプロジェクトの中で、インタビューで学生が指摘していた「多くの学生が教材開発に係るべきではないか」を実現できる環境を整備していくことが重要です。また、他の学生が指摘していた「静かに聴講している様子を他の教員も知れば普及するのではないか」という意見に耳を傾け、多くの教職員がeラーニングに興味を持つことを出発点として、現代GP、通信教育部の無限大キャンパス、今年度実施した総務省の非同期型eラーニングシステムなど多くのeラーニングの実績をもとに、本学の教職員が一丸となって「教育を変える」eラーニングを目指していければと思います。

平成19年度 北海道情報大学説明会を実施

平成20年2月18日(月)東京中野サンプラザで北海道情報大学説明会を実施いたしました。この説明会の目的は、首都圏に本社がある企業に対し、本学の教育内容の説明と、学生の研究発表を通して、本学が目指す方向を理解していただくことです。

説明会は松尾理事長の挨拶に始まり、嘉数学長から大学を巡る環境変化として、少子化時代を迎え、量から質への政策転換を行うため、学士課程教育の改革が叫ばれており、本学においても教育サービスの視点から諸制度見直し等を行い、大学・教育そのものが改革・変身しなければならないことを報告いたしました。

引き続き、学生の研究発表として経営ネットワーク学科2年紺谷昂君から「学習者適応型e-Learning授業の体験 ～情報システム学概論を学ぶ～」、システム情報学科4年吉崎順太君からJUDE APIとEclipseプラグインによる実装「モデル駆動開発を支援するツールの



開発」、情報メディア学科4年木村康孝君から「Microsoft DirectShowを利用した動画編集プログラムの作成」を発表いたしました。

その後、システム情報学科4年西村秀和君と通信教育部北九州教育センター4年狭間俊胤君から卒業生代表の挨拶を行いました。

休憩を挟み、本学経営情報学部医療情報学科教授医学博士西平順先生から「医療分野における情報技術者の育成について ～医療現場からの要望に応えるために～」と題して特別講演を行っていただきました。

参加された企業数は257社、参加者は352名でした。参加された方からは研究教育内容がよく理解できたと好評でした。

(学生サポートセンター事務室)



北海道映像コンクールで優秀賞

情報メディア学部 3年 佐藤 賢児

今年1月11日、日本テレビ映画技術協会が主催する第13回北海道映像コンクールの表彰式が行われ、情報大学大学院の細川雄矢さんの作品「Path to the Lights」が学生部門で優秀賞を受賞しました。このコンクールは、放送局や制作会社などのプロの作品を対象にしたもので、受賞作品は、優れた撮影技術や編集技術に加えて、今を生きる若者のリアリティを問うという難しいテーマへの挑戦が高く評価されたものです。

僕もこれから就職活動に動き出す身ということもあって、アルバイトで生活を支えながら、バンド活動を続ける若者を描いたこの作品に、強いシンパシーを感じました。

今回受賞した細川さんも学んだ多田ゼミは、映像表現で伝えたことを形にする手法と技法を学びます。まず、企画を立て、取材して素材を集め、メッセージがよりよく伝わるよう構成します。その上で、撮影し編集し音を入れ、パッケージ化します。このように映像制作の流れを実際の作品制作を通して学びます。編集作業やパッケージづくりには動画編集ソフトだけでなく、静止画を加工するものやドローイングソフトやDTMソフトなど数々のソフトを駆使します。また、作品は北海道映像コンクールだけでなくさまざまなコンベンションに積極的に参加し、賞を狙います。その他、放送局と変わらない装備をしたスタジオでマルチカメラを使った番組制作の実習や、ゼミ生が、3つのグループに分かれて企画を競い合うグループ制作の実習などを通して腕を磨きます。

グループ制作ではとにかく何度も企画会議を開きます。何も無いところから何かを生み



受賞した細川さん

出すという作業は、苦しいことですが、一方で楽しくもあるという不思議な感覚です。それもこのゼミが、オリジナリティのある発想と、人とのかかわりを大切にするゼミだからだと思います。

去年の12月20日には、松尾記念館講堂で、これまでゼミで制作した作品の上映会を実施しました。上映作品は今回、北海道映像コンクールで受賞した「Path to the Lights」のほか、過去に同賞を受賞した「森のふくろう」「江別やきもの市」、そして、昨年夏、日高青少年自然の家が主催した「日高山脈冒険隊」に12日間密着取材したドキュメンタリーの4作品です。中でも日高山脈冒険隊は、小中学生30人がマウンテンバイクで500キロを走破するというイベントで、撮影にはゼミ生7人が交代で当たった思い出の多い作品です。自分たちの作品を大きなスクリーンで見るといった体験は初めてで、さながら映画館といった感じでした。これからもこうした機会を作って作品を公開していきたいとおもいますので、その時にはぜひ見に来てください。たくさんの人に見てもらえれば、ゼミも一層活気付きます。

情報大「きぼう」プロジェクト始動!

JAXA「きぼう」TOPページ

情報大が制作した
オープニングフラッシュ公開中!



JAXA「きぼう」日本実験棟サイトURL
<http://kibo.jaxa.jp/>



情報大「きぼう」プロジェクト代表
情報メディア学部 准教授
安田 光孝

情報大「きぼう」プロジェクトは、eDCグループである宇宙技術開発株式会社との産学連携の形をとり、JAXA（宇宙航空研究開発機構）に対し「きぼう」日本実験棟Webサイトのコンテンツの一部を開発・供給するものです。第一弾では、きぼうの打上げ日時をカウントダウンする「オープニングフラッシュ」ときぼうを子供向けに説明する「きぼうツアー」を制作します。

本プロジェクトでは、実践的な教育を施すことを信念に、企画、シナリオ、デザイン、3D、プログラミング、ナレーション、音響効果、そしてクライアント対応にいたるすべてを学生が行っています。是非みなさまもJAXA「きぼう」日本実験棟Webサイトを訪れてきぼうと共に情報大学生を応援して下さい。

「きぼう」について

「きぼう」とは、宇宙における日本初の有人施設で、2008年3月から3回にわけて、スペースシャトルによって、ISS（国際宇宙ステーション）に運ばれます。その後、宇宙空間において数々の実験を行います。

第1回目の打ち上げは、3月11日の予定です、日本からは土井隆雄飛行士が搭乗します。（この学内報が出る頃には打ち上げは完了しているでしょう）2008年、「きぼう」を足がかりとして本格的な有人宇宙開発がはじまります。



情報メディア学部 准教授
向田 茂

1月28、29日の2日間、石井、今泉、松浦、杉澤の学生4名と、安田、向田の教員2名は、SEDとの打合せと筑波宇宙センターの見学を兼ね、茨城県の筑波研究学園都市へ行ってきました。初日は、SED筑波事業所にて打ち合わせを行い、2日目はJAXAの見学ツアーに参加しました。実物大の「きぼう」を見学したことで、漠然としていたイメージが具体的なものとなり、メンバーの志気も大いにあがりました。

筑波宇宙センター見学





全体統括・Flashオーサリング
シナリオ・イラスト・ナレーション
3DCGアニメーション制作

//
Flashスクリプト制御
Flashアニメーション

//
音響効果全般

情報メディア学部 准教授

//
//

石井 真人 (院1年)
杉澤 愛美 (2年)
松浦 瑛二 (3年)
今泉 直人 (3年)
越智 健 (3年)
得永 和矢 (3年)
星野 秀典 (2年)
伊藤 紗弥香 (2年)

安田 光孝
向田 茂
斎藤 一

オープニングフラッシュ 書簡記



メディア制作論プログラム
大学院修士 1年
石井 真人

僕の役割は「きぼう」のサイトのトップページに載せるFlashのスク립ト部分で、ミッションが行われるまでのカウントダウンスク립トを作るというものでした。

スク립トを書くだけでも大変なのに、数字が変わる度にキーボーが動くよう演出を強要され、その上つくるにつれて様々な機能の追加もいやおうなく強いられました。世知辛い世の中です。

日頃の勉強不足もあり正直言って大変な毎日でした。しかし手のかかる子ほど可愛いと言うのは本当で、素直にキーボーが動いてくれた時にはこの上ない達成感を感じました。



フラッシュアニメ

「きぼう」ツアー4月公開予定

情報メディア学科 2年
杉澤 愛美



情報メディア学科 3年
松浦 瑛二

「きぼう」のシンボルキャラクター「キーボー」のモデリング及びアニメーションを担当しています。皆には「3日間で元のイラストから3Dモデルを作った」と言っていたのですが、実は一時間だったのはここだけの話。

情報メディア学科 3年
今泉 直人



私の担当はきぼう日本実験棟の3Dムービーの作成です。

当初、相方のサポーターの予定だったのですが、急に昇格しました。きぼう実験棟のムービーの大半はカメラワークのみなので、実は作業時間よりレンダリング時間の方が長いです。



(C) JAXA / (株) ナルミヤ・インターナショナル
「きぼう」応援キッズプロジェクトキャラクター
「キーボー」

2007年度 第7回Webデザインコンテストの結果

北海道情報大学Webデザインコンテスト実行グループ

(安田光孝, 広奥 暢, 隼田尚彦, 谷川 健, サイモンソーラ, 斉藤 一, 穴田有一)

今年度の第7回Webデザインコンテストには45作品、56人の学生から応募がありました。授業で学んだ知識や技術を定着・発展させることを目的の一つとして始めたWebデザインコンテストも7年の歳月を経て、ようやく学生の皆さんに定着してきたと思います。これからは質の高い作品が多く生まれるように支援していきたいと思います。そのような支援の一つの試みとして、今回のコンテストから作品の応募方法を変えました。



コンテスト授賞式

テーマ部門優秀賞作品



フリー部門優秀賞作品



サーバーによるエラーチェックを受け間違いを修正した上で本提出することになりました。このシステムは私たち実行グループのメンバーのうち斉藤一先生を中心に、広奥先生、隼田先生、谷川先生が学内共同研究として大学の資金援助を受けて開発したものです。コンテストに応募する際にソースコードのミスを学生自らが確認し修正するこ

とで、コンテストの場でも学習してもらおうという趣旨から開発されたものです。今回も多くの楽しい作品に出会えました。紙数の制限があるので受賞者全てを紹介することはできませんが、次の皆さんが各部門の優秀賞を受賞しました。(註)

とで、コンテストの場でも学習してもらおうという趣旨から開発されたものです。

今回も多くの楽しい作品に出会えました。紙数の制限があるので受賞者全てを紹介することはできませんが、次の皆さんが各部門の優秀賞を受賞しました。(註)

次回も多くの学生の皆さんの素敵な作品に出会えることを楽しみにしています。

- ・最優秀賞 該当作品なし
- ・テーマ部門優秀賞『情報大学へ行こう!』
白石妙子、岸祐介、太田和輝、杉澤愛美
- ・フリー部門優秀賞『猫にまたたび』原沙也加
- ・ビギナー部門優秀賞『my favorite...』
柴田奈々
- ・ポスター部門優秀賞 該当作品なし

最後になりましたが、作品の審査に当たっては、本学客員准教授・川上正博先生、本学非常勤講師・徳中康弘先生にも御協力いただきました。この場を借りて御礼申し上げます。

(註) 受賞者全員の氏名は次のWebサイトに掲載されています。

<http://wdc.do-johodai.ac.jp/>



ビギナー部門優秀賞作品

川上ゼミの研究が 十勝毎日新聞

十勝のメジャー新聞 に掲載されました。



web site

掲載された十勝毎日新聞の記事(左)
ウェブサイト「Butadon.com」にも掲載されている(上)

2007年12月7日付の「十勝毎日新聞」第2社会面に川上ゼミの「豚丼研究チーム」のニュースが掲載されました。

さらにBUTADON.comのニュースにもなりました(現在も掲載中)。

川上ゼミは広告とビジュアルでデザインを研究するゼミです。ゼミ生は、日ごろの研究成果の腕試しとして、学内外のコンペにデザインなどを出品し、早くも各賞をゲットしています。

当ゼミでは、広告のコンセプトづくりに重きをおき、デザインを完成させる過程として、その商品の背景を研究し、マーケットリサーチを実施し、その商品がおかれている状況、消費者の持っている認識やイメージを分析します。

その上で今「訴えなければならぬのは何か」という広告のコンセプトを決め、ターゲットとする客層を決める。それからデザイン、コピー、ビジュアルを検討し、広告のデザイン(今回は公共交通内の中吊りポスター)として完成する。このような過程から生まれたデザインを、評価の対象としています。

豚丼の広告研究については、四年生の指導の下、今年度の三年生がチームをつくり、調査研究し、数度のゼミ内外のプレゼンを実施、その反応な

どを加え再考し作り上げてきました。

さらに、写真の撮影は札幌市内の専門学校・札幌ビジュアルアーツとのコラボレーションで、プロの写真家の指導により行いました。

また、札幌ビジュアルアーツの学生諸君にも企画をプレゼンテーションし、意見を交換しました。撮影においてはセッティングやライティングなど協力していただき機材も提供していただき撮影しました。とても楽しい体験だったようです。

広告のコンセプトは、「豚丼の魅力を本州にも広める」ということで、若者の情報伝達手段の筆頭である携帯を使って、友達間で話題が広がっていく様子をビジュアルにしました。なかなか新鮮な切り口の広告になったと思います。

2月には、豚丼発祥の地である十勝支庁から連絡を頂き、研究資料を参考にしたいという申し出がありました。また、今後もゼミの豚丼チームが研究を続けるということで、豚丼のお店の方や行政と当ゼミが、それぞれの情報を共有しながら、十勝の名物を全国的に広めていく活動ができれば…とも話していただきました。

(情報メディア学科 客員准教授 川上 正博)



教えたかったのはコレ。

左が出来上がったポスター。材料から食器の調達。そして調理も3年生が役割を決めて準備し、スタジオに持ち込んだもの。

<制作の流れ>

1. テーブルの豚丼と味噌汁の写真を撮る。ピントは少しボケさせる。
2. 携帯のアップ写真を撮る。
3. 携帯のモニターに写すための豚丼を撮る。ピントはシャープに。
4. 上記3つの写真を合成する。



marketing

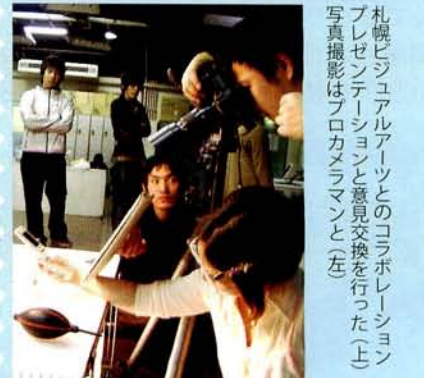
大通公園でのマーケティングリサーチ



他ゼミでのプレゼンテーション(隼田ゼミ)



collaboration



札幌ビジュアルアーツとのコラボレーション
プレゼンテーションと意見交換を行った(上)
写真撮影はプロカメラマンと(左)

昨年11月から12月にかけて第2回北海道情報大学プログラミングコンテストが開催され、今年の1月10日に受賞者の表彰式が行なわれました。今回のコンテストは応募作品が大幅に増え、上位の作品は非常にレベルの高い物となりました。選考された9作品の応募者に説明とデモ、アピールポイントの紹介などを行う公開プレゼンテーションを行ってもらい最終審査の結果以下のように受賞作品が決定しました。

＊ 最優秀賞

+ システム情報学科4年、宮西和機
「Javaによるタスクシステムの実装」

＊ 優秀賞

+ システム情報学科4年、吉崎順太
「SQLクエリブラウザyellin'」

＊ 奨励賞

+ システム情報学科4年、森川 貴康
「WUML」
+ システム情報学科4年、井上 喬視
「FlickrViewer for Android」

以上の作品を順に簡単に紹介すると、多くのオブジェクトが能動的に動作するプログラムを作成



するための基盤となるシステムの開発、様々なデータベースにアクセスして情報を表示できるブラウザ、プログラムの設計を支援するUMLのエディタ、最新の携帯電話で動作する画像共有サイトの人気画像表示アプリ、となります。詳細は学内のウェブサイトで公開しています。

今回の応募作品はシステム情報学科の3、4年生の物だけであったのが残念です。本コンテストの評価ポイントはプログラムの技術面が中心ですが、作品自体のアイデアやインターフェースのデザインなども重要です。チームで参加することも可能ですので、次年度は多くの学科からの参加を期待したいと思います。(齋藤健司)

第2回 プログラミングコンテスト

TOEFLの会場となつて

昨年12月1日と今年の2月9日に、本学の実習室1を会場としてTOEFLが実施されました。ご存知の方も多いと思いますがTOEFL(トーフルまたはトウフルと発音します)は、アメリカやカナダの大学・大学院に留学する際に受験を義務づけられている、英語力を証明するための世界的統一試験です。アメリカにあるETSが試験の実施・運営にあたっています。大学によって点数は変わりますが、このテストで一定の点数を取らないと講義を受けられず、せっかく現地に行っても英語の訓練を受けなくてはなりません。以前は試験用紙(PBTといいますが)で実施されていたTOEFLは、2000年からコンピューター(CBT)を使用するようになり、さらに2006年からインターネット(iBT)で受験する方式に変更になりました。以前はなかった会話や作文の試験も追加されました。

昨年このTOEFL iBTの公開会場校のお誘いを、関係機関からいただきました。これまで北海道で

経営情報学部 准教授 竹内 典彦

は1か所しか会場がなく、多くの受験者が東京まで出向くなど、不便を強いられていました。本学は情報大学の名のとおり、コンピューターの実習室をいくつも抱えており、TOEFL iBT実施の基本環境は整ってありました。検討の結果、建学の理念である国際性を養う方針にも沿うものであり、会場を引き受けることになりました。情報センターの細川さんや総務課の河野さんにもスタッフになっていただき、チームで運営にあたっています。



本学はカリフォルニア大学サンタクルズ校と姉妹関係にあり、長期(1年)留学制度もあります。学生にとって受けやすい環境が整ったわけですから、積極的にTOEFLを受験してほしいと思います。なお申込みに関わる情報はETSのウェブサイトで確認するか、筆者まで問い合わせてください。私たちは「留学を志す人たちのお手伝いができれば」と考えて、次の試験に備えています。



4回目を迎えたビジネスプランコンテストは昨年9月26日に説明会が行われ、11月30日に応募の締め切りを行いました。書類による1次審査の結果、ビジネスアイデア部門から2作品、ビジネスプラン部門からは5作品が選考を通過しました。

2次審査のプレゼンテーションは12月12日に202教室で実施され、アイデアやプランの内容とプレゼンテーションについて厳正な審査の結果、以下の諸君が受賞しました。今年は新しい試みとして、経営ネットワークの先生方の協力でゼミの時間を振り替えてもらい、説明会と発表会を行ったため多くの学生が参加しました。

◎ビジネスアイデア部門

- ・アイデア賞：該当なし
- ・アイデア奨励賞：「タクシーのボタン呼び出し」
経営ネットワーク学科3年 山本達也、河本浩一郎、川田陽介、後藤靖弘
同：「レシートを利用した広告ビジネス」
経営ネットワーク学科3年 佐藤朋樹、上村智司

◎ビジネスプラン部門

- ・最優秀賞：「ビザ屋の24時間営業」
経営ネットワーク学科4年 齊藤梨沙
- ・優秀賞：「太陽光発電」
経営ネットワーク学科4年 竹元祥
- ・奨励賞：「大学施設を使った地域住民との交流」

- 経営ネットワーク学科3年 河本浩一郎、後藤靖弘
- ・審査委員特別賞：「便利タクシー」
- 経営ネットワーク学科4年 大西彩子
「ただECO袋」
- 経営ネットワーク学科3年 赤田大輔、鈴木裕、森真也

今回はアイデア部門が応募数も少なく不作で、残念ながらアイデア賞は該当なし、となりました。プラン部門は昨年と比べ、まとめ方もビジネスプランにふさわしいものが多く、3年生の受賞者も多いので次回に期待がもてます。全体的に趣旨と異なる内容の応募があったり、プレゼンテーションのやり方で評価を落としたりするケースが見られ今後のスキルアップが望まれます。(中村忠之)



第4回 ビジネスプレゼンテーションコンテスト

第2回 北海道情報大学CMコンテスト

学生の制作した映像やCGを本学のテレビCMに使用して、本学学生の技術力や表現力を幅広くアピールしていくということで、昨年度から始まりましたこのコンテスト。北海道情報大学を効果的にPRするというだけではなく、学生にとっても自分の制作した映像やCGが実際にテレビで放映されるというのは、なかなか経験できないことであり、「とっておきの腕試し」というキャッチコピーどおり、高いモチベーションで作品制作に取り組み、個々の技術やスキルの向上を図るきっかけになればとも思っております。

2回目となった今回も、15秒CMの前半8秒部分をテーマフリーで制作するという、昨年と同じ条件での作品募集としました。応募状況ですが、応募者は全員情報メディア学科の学生となっており、2年生1名、3年生4名の計5名6作品となりました。また、前回は3~4名のグループでの応募が4グループありましたが、今回はすべて個人での応募となりました。応募作品数で見ると、12作品の応募があった昨年度の半分となりましたが、作品のクオリティは全体的に昨年度よりも高く、CMとして実際にテレビで放映することを十分に意識して制作されたことが感じ取れる作品ばかりでした。前回もそうでしたが、大きな修正や加工を施すことなく、テレビCMの映像素材としてそのまま使用できる作品がいくつも提出される点で、本学学生の技術力・表現力に一定の評価が与えられるのではないかと感じます。

さて、今回の受賞者は、以下のとおりです。受賞した3作品はいずれも、広報室においてそれぞれ1本15秒のCM

に編集し、4月以降に順次放映していく予定です。また、後日、本学ホームページでも公開いたしますので、是非ご覧になってみてください。

《第2回 北海道情報大学CMコンテスト 結果》

- ◎最優秀賞 (副賞10万円)
『無限大HIU』
松浦 瑛二 情報メディア学科3年
- ◎優秀賞 (副賞5万円)
『I/O』
熊谷 啓太 情報メディア学科3年
- ◎入賞 (副賞1万円)
『Information Line』
今河沙緒理 情報メディア学科2年

(広報室)



北海道情報大学 雪灯小路

2月12日 6:00PM



ここは、本学裏の普段は何も無い真っ白な雪原。冬の夜の暗闇の中に突如、たくさんのろうそくに照らされ、ほのかに光輝く道が現れました。2008年2月12日午後6時。総参加者60名以上。この「雪灯小路（ゆきあかりこみち）」は開催されました。

当日は風もなく天候に恵まれました。参加者の方々にお話を聞いてみました。

情報メディア学科 中野渡さん、星君、高橋君、林君

— ご覧になってどうですか？

一同：綺麗。でも寒い。

(林)：ろうそくいっぱい置いたよ。

(高)：近くから見ると遠くから見たほうがもっと綺麗。星みたい。

(中)：身内だけやと思ってたけど、結構人来てて思ったより全然良かった。夏祭りの提灯みたいで綺麗やわ。

(星)：ローコスト（参加費は100円）で、こういったいいものが出来るって素晴らしいね。

(林)：今日は吹雪いて無くてよかった。江別はいつも風が強いのに。

(星)：でも、やっぱり江別は寒いな。あと5度は欲しい。

(高)：もっと人がいればあったかくなるかもね。

(星)：それにつけてもこの豚汁はうまいなあ。

一同：うんうん、うますぎ。うますぎ（笑）



当日は、豚汁や温かい飲み物、お菓子（全て無料）が振舞われました。ボランティアの学生さん、ご苦勞様でした。雪のスクリーンも登場。

近所からのお客さま

（イベントには母・息子の3人でご参加いただきました）

— どちらからお越しに？

近所の末広町から来ました。息子（医療情報学科 2年 小川善弘君）が情報大に通ってて、息子からこのイベントのことを聞きました。

— ご覧になってどうですか？

綺麗ですね。雪も降ってなくてね。いい感じに。もっと人が少ないと思ってたけど結構賑わってて。自分で火をつけるのがいいですね。なんだか昔を思い出して懐かしいです。こういうのもっとあるといいですね。是非、来年も来たいです。



このイベントを企画した隼田准教授

（イベントにはご家族でご参加いただきました）

— 実現した「雪灯小路」をご覧になってどうですか？

良かった。思った通りのものが出来たよ。近所の方々も来てくれて嬉しいね。

雪原の中でゆらゆらって揺れる、この炎のゆれ加減にわびさびを感じる。人口の光じゃ出せない。参加型のイベントだから、参加者が雪穴をあけて、ろうそくに置き火をつける。この寒さの中で自分たちで火をつけてゆくっていうのがまたいいよね。

普段は何も無く何にも使われない場所に、こういった綺麗なものが出来上がるっていうのがいいよね。これからに向けて、いい実験になったよ。

— ということは来年も？

もちろん。来年からはろうそくだけじゃなくて、情報大学らしくメディアアートの要素も入れていきたい。

サーチライトをずらーっと並べて照らしたり、レーザー光線でオーロラを作ったり。雪面をキャンパスに、光を使ったアートを創造していきたい。アナログとデジタルを融合して新しいものを作り上げていきたいね。

今回は私が企画して、準備を学生にしてもらったんだけど、これからは学生が主体になって企画とかをさせていきたいね。また、いずれは大学内だけでなく、地元である江別のイベントにしていきたい。江別のイベントにこれと似たろうそくを使ったものがあって、それとタイアップしたり。

今回はあくまで実験に過ぎない。次回からはもっと時間をかけて、このイベントをどんどん大きくしていきたいね。

— 今回は成功ですか？

大成功です。



この静かで和やかなイベントは、将来への伏線だったのです。ろうそくの光がずっと続くこの道は、未来へ飛び立つための滑走路のように見えました。



取材 / 文 / ページデザイン：情報メディア学科 1年 黒田 学
監修 / 写真撮影：情報メディア学科 准教授 安田 光孝

東京大学大学院 合格体験記

経営情報学部 4年 森川 貴康



こんにちは、谷川ゼミを卒業した森川と申します。
この度私は東京大学大学院工学系研究科修士課程に入学する事になりました。今回は、この場をお借りして受験から合格までの道のりを綴り、本学の今後の受験生にとっての糧になれば幸いです。

受験の体験記として初めに述べるべきはやはり動機であると私は考えています。季節は初夏の頃、卒業論文に「何か面白い事をやりたい」、「新規性のあるものを研究したい」とは考えていてもアプローチの仕方が全く分からず、見当違いな方へ迷惑が向いていました。先進的な研究、それに関する学習を行うにはどうすればいいのか？ それに対する一つの解として頭に浮かんだのが他大学の大学院への進学でした。ネットワーク、特に分散処理に関して興味があったのでそれらをキーワードに検索をかけた所、上位に東京大学大学院が表示されていたのが志望したきっかけでした。

東京大学大学院の受験を検討し始めた私は先ず、希望する研究室の訪問を行いました。面会して下さった教授から研究室で行っている研究の詳細について説明を受け、研究室に実際案内して頂き、その場の雰囲気を体感させて頂きました。これらはWEBサイトから得る事が出来なく、尚且つとても重要な情報でした。

自分の希望する環境である事の確認がしっかりと出来た為、出願へ向けての準備を行いました。当時既に出願分類Ⅰの募集締め切りは過ぎており、比べて合格率の低い出願分類Ⅱでの受験となりました。

入学試験の試験項目は筆記試験(専門科目・英語)と口述試験の三点でした。

受験勉強としては、筆記試験に関してはWEB上で公開されている専門科目の過去問を解きました。そして英語に関しては、TOEIC若しくはTOEFLのスコアシートの提出だったので、私はTOEICを選択し、その対策の勉強を行いました。

過去問に関しては、「解ける問題」・「時間をかければ解ける問題」・「問題文すら解読出来ない問題」の三種類がありました。その時点で時間があまり無いと判断したため、「解ける問題」と「時間をかければ解ける問題」に重点的に力を入れて勉強をしました。

TOEICに関しては、独学ではとてもスコアの向上が見込めなかったため、竹内先生が担当して下さっていた自主ゼミ「TOEIC対策講座」に参加し、こつこつと積み重ねるように学習していきました。毎週分野を絞り丁寧に解説を交えて教えて下さったので、着実に力が付きました。

これらの受験対策を行った上での試験結果は、無事第一志望の研究室に配属されるという私が一番望んだ形になりました。試験の出来ですが、提出したTOEICのスコアは合格ライン(700を超える)と問題は無いようです)の遥か下でした。しかし筆記試験は中島潤先生及び本学大学院の先輩方の下で学んだ知識を多く活かす事が出来、簡単に感じました。また口述試験では大学院に志望した動機を、試験結果と比べながら質問されました。他の受験生に聞いたのですが、動機に見合った試験結果を残せていないと突っ込まれるそうです。その他には大学院生活に望むことや狙いを深く質問されました。

受験を終えての感想ですが、筆記試験と同等かそれ以上に口述試験が重要視されている様に感じました。普段からしっかりと目的意識を持っている事をアピールする事が大切だと思います。

以上が志望から合格までの道のりでした。

長くなりましたが最後に、ゼミ生としての二年間忍耐強く指導し続けて下さった谷川健教授、科目等履修生としての一年間主査として指導して下さいの中島潤准教授、そして本当に優秀な同科目等履修生の友人達、大学院の先輩方に、同じエンジニアの道を生きていく偉大なる先輩として、そしてライバルとして尊敬の念と感謝の気持ちを込めて締めとさせていただきます。

外国研修を終えて

情報メディア学部 教授 平子 玲子

9月11日から12月8日の間、韓国ソウルの梨花女子大学において研修してきましたので、その報告をいたします。

まず皆さんは韓国と聞いたらどんなイメージを思い浮かべるでしょうか。最近でしたら「韓流ブーム」にのって日本に流入してくるスターたちの顔でしょうか。それとも整形天国のイメージでしょうか。わたくしが学生のころは、日本の植民地支配によって多くの傷をかかえた国、軍人大統領のもとで独裁政治が行われているちょっと怖い国(民主化は1887年、ソウルオリンピックの前年)というイメージが強烈でした。わたくしは日本近代史を専門としていた関係上、日韓関係の歴史についてずっと興味を持ってきました。今回の研修もこうした関心のもとに実現しました。

わたくしが籍を置いたのは、梨花女子大学にある韓国女性研究院です。まず梨花女子大学について簡単に紹介しましょう。1886年(明治19)に梨花学堂として、アメリカ人宣教師

スクレンド女史によって設立されました。以来1910年に大学科を新設して今日まで、長い歴史と伝統のある大学です。総合大学で、現在学生15,000名大学院生5,000名余りを擁する名門女子大です。世界一大きい女子大と言われています。小高い丘もある広大なキャンパスを有しています。韓国女性研究院は30年の歴史を持つ研究所で、常に韓国の女性学をリードしてきました。梨花女子大学は韓国の女性学・女性史研究の中心といえる存在です。

さてわたくしの研修テーマは「在朝日本人女性に関する基礎的研究」でした。近代の時期それも主として日本の植民地とされた時代(1910-45)に朝鮮に渡った、日本人女性に関する歴史資料(Archives)の所在を探ることでした。簡単に言えば、資料調査・収集です。いくつかの関連文献を入手しそれを読むかわら、研究者に会って情報提供を受けることを始めましたが、当初は手探り状態でした。大いに助かったのは「韓国歴史情報統合システム」というサイトの存在でした。ここにキーワードを入力して検索すると関連資料とその所在がわかる、とても便利なものです。数日間はこのサイトを見続け関連資料がいくつか浮かび上がってきました。具体的には『東亜日報』に多くの記事が掲載されていることがわかりました。また梨花女子大学中央図書館所蔵の『毎日申報』にも関連記事が掲載されていることがわかり、毎日図書館に行き、関連箇所をコピーし始めました。この新聞は復刻版で全85冊という膨大な量でしたが、すべて見終



韓国国立中央図書館

えてどっさりコピーをしました。毎日のように複写コーナーでコピーしたものですから、学生からコピー機を管理しているアジュモニ(おばさんのこと)に間違えられる一幕もありました。

そんななかで力強い助力者を得ました。現在梨花女子大学大学院歴史科の博士課程に在学中の菅原百合さんです。韓国に10年近く暮らす彼女は、いつもわたくしを助けてくれました。とくに彼女と二人で釜山市立図書館に資料調査に行った時には、よき助手として働いてくれました。

彼女には本当に感謝の言葉しかありません。釜山は朝鮮戦争(1950-53)で戦火を被らなかったために、古い資料がたくさん残されていました。もともとのこの図書館は日本が支配していた時代の産物で、明治時代に出版された福沢諭吉の本などが大切に所蔵されていました。当時の新聞もそろっていましたが、2泊3日という短期間では如何ともしがたく、次の機会を待ちたいと思います。また仲介してくださった方のおかげで、昔、日本語の教師をしていたという方(やさしいおじいちゃん)が待っていてくれました。ここでもどっさりコピーをして持ち帰りました。鞆の重さもなんのその、資料に出会えた喜びでウキウキしていました。

国立中央図書館にも通いつめ、多くの文献・資料を収集しました。探せばあるものです。久しぶりに資料調査の醍醐味を味わった3カ月間でした。

でも図書館通いばかりしていたわけではありません。多くの研究者と会い、情報交換し、



韓国女性研究院

学会参加・発表もしました。発表を韓国語で行うときには緊張しましたが、無事終えることができました。この1月で韓国語歴11年ですが、学問的対話は難しいです。もっと勉強しなければの思いを強くしました。またほぼ毎日、大学のキャンパスを散歩(ウォーキング)しました。朝7時ころから40分くらい。季節の移り変わりを楽しみながら(韓国の夏から秋はとても美しいのです。特に紅葉の美しさは天下一品)、時にはリスや雉に逢いながら。そのためか、一度も体調を崩さずに無事研修を終えることができました。こころよく研修を許可して下さった大学・関係者の方々にこの場を借りてお礼申し上げます。

(2008.2.4 記)

「Snow Carnival」に今年も参加しました

情報メディア学部 教授 松井 伸也

2月9日(土)の午後から江別市国際交流推進協議会の主催で「2008 Snow Carnival」が行われ、本学の学生もボランティアとして参加しました。イベントクラブ・COC・ボランティアサークルの学生が、前日の午後と当日の午前をかけ準備し本番を向かえました。

さて当日は多数の家族(延べ150人程度)が参加し、本学の学生が作成した大きな滑り台(タイヤでGO)・小さな滑り台(手製のそりでGO)・雪像(どーもくん)・かまくら(3つ)をはじめ、雪上ゲーム(的当て・宝探し・そり競争)を楽しんでもらえました。本学の学生の他にも北翔大学の学生・とわの森三愛高



校の生徒たちが、参加し活躍してくれたことも忘れられません。さらに江別市内のNPO法人の方々の手作りで、お雑煮・焼き鳥・焼き芋・お菓子などが無料でふるまわれました。グレシャム(姉妹都市)からの中学生一行をはじめ海外からのお客さんも多数参加し、子供たちと共に餅つき体験などをしてくれたことも記しておきたいと思います。

このSnow Carnivalは本学の教員であった野沢先生(故人)が、その開催に尽力なされ本学の学生が多数参加するきっかけを作られました。今後も本学の学生が様々な形・場所でボランティアとして活動してくれることを願い報告とします。



学生サポートセンターより

今後の就職活動について&卒業生へのメッセージ

米国のサブプライムローンを発端とした世界株安、そして円高と景気の先行きが懸念されるような動きが最近見られます。株価は6カ月後の景気を示すとも言われますが、今年後半の採用状況に何らかの影響があることも想定し、前半に積極的に就職活動を行うべきでしょう。幸い、平成21年3月卒業生の求人社数は現在のところ約1,500社と昨年比約6%増で推移しています。しかし、昨年度の北海道内企業の求人社数は約280社と一昨年度と変わらず、今年度も同様の求人社数となることが予想されることから、道内企業への就職は苦戦を強いられると思います。実際、北海道労働局が発表した2月の有効求人倍率は0.53倍と全国平均の約半分となっています。また世間では売り手市場と言われますが、就職情報誌の調査では学生の採用に「量よりも質を優先する」と回答した企業が約90%と採用基準を下げることはありません。このような状況から4年生は厳しい就職活動を余儀なくされると考えてください。面接、書類作成等就職に関する質問や疑問等、何か困ったこと、分からないことがありましたら何でも構いませんので、いつでも学生サポートセンターまで相談に来てください。

3年生は近年採用活動が早期化し、3年生のうちの内定を獲得する学生が増える傾向にあります。このような状況を踏まえ、就職活動において最低限必要な知識等を習得するための支援活動としてキャリアサポートを5月から毎週行っています。年間約20回のガイダンスやSPI等の各種試験対策を行いますので、休むことなく参加してスムーズに就職活動に入れるよう準備をしておいてください。

今年3月に卒業した人は慣れない社会人生活を送っていることでしょう。北海道経済の回復が全国に比べ遅れている中、平成19年度も道内トップ

クラスとなる97.2%の非常に高い内定率を残すことができました。これは皆さんが積極的に就職活動を行った結果です。ところで、皆さんは「二人の石切り職人」の寓話を知っていますか？旅人が新しい教会を建設している町を通りがかったときの話しです。建築現場では、二人の石切り職人が働いていました。興味を持った旅人は、その一人に尋ねました。「あなたは何をしていますのですか？」、その質問に「このいまましい石を切るために、悪戦苦闘しているのさ」、そこで旅人はもう一人の職人に同じ質問をしました。するとその職人は生き生きとした声でこう答えました。「いま、私は人々の心の安らぎの場となる素晴らしい教会を造っているのです」。どのような仕事をしているか、それが我々の「仕事の価値」を決めるのではなく、その仕事の彼方に何を見つめているかにより我々の「仕事の価値」を決めるのです。この考え方の差が、皆さんが今後仕事をしていく上で大きな影響を与えることは間違いありません。社会人となった今、「仕事をする」とはどういうことか、時間がある時に一度考えてみてはいかがでしょうか？ (学生サポートセンター事務室)



本学主催合同企業説明会（平成20年3月6日実施）

平成19年度 就職内定率（平成20年3月28日現在）

区分	経営ネットワーク学科	システム情報学科	情報メディア学科	全体
卒業生数	75	87	156	318
就職希望者数	70	78	141	289
内定者数	66	77	138	281
内定率	94.3%	98.7%	97.9%	97.2%

日本経済青年協議会 「洋上研修」に参加して

広報室 富樫 恵一

平成20年2月15日(金)から2月23日(土)の9日間、社団法人日本経済青年協議会(略称;日経青)主催の「第39回日経青洋上研修」に参加いたしましたので、ご報告いたします。

日経青は、各業種企業の手先・中堅層の相互啓発と国際交流の機関として昭和32年10月に、経済4団体(旧日経連、経団連、経済同友会、日本商工会議所)の支援により設立され、以来40数年にわたって、新入社員研修、リーダー研修、管理・監督者教育、人事労務管理・労働法専門講座、洋上研修、国際交流事業などの諸活動を展開しています。

今回私が参加させていただきました洋上研修は、昭和47年にその第1回が開催されてから今回で39回を数え、我が国の洋上研修としては、最も古く実績のあるものとなっております。渡航地研修や船上での研修・生活をとおして、自ら課題を設定し、解決に取り組み、グローバル時代のリーダーとして自己発見と成長を促すこと、また、訪問国の工場見学、流通事情調査や異文化の視察及び現地企業人との人的交流を通じ、国際的な視野を広げることを趣旨とし実施されています。

今回の参加者は55名(昨年45名)で、年齢構成は20代後半から50代前半まで幅広く、また、関東地区中心ではありましたが北海道から九州まで全国各地のさまざまな業種・業種からの参加となっていました。参加者は10名程度で1つの班を構成し、これが「縦割り」の研修を進める班別の組織となります。さらに班員は、生活委員会・研修委員会・報告書委員会のいずれかの役割委員会にそれぞれ所属し、「縦割り」の活動も進めていきます。参加者自身がリーダーとして、またフォロワーとして、お互いの役割を果たしながら「縦割り」と「横割り」の活動を自主運営していくシステムが本洋上研修の特長となっています。

今回の研修で訪問した国は、シンガポール、マレーシア(ペナン島)、タイ(プーケット)の3カ国でした。日本-シンガポール間は往復とも航空機で移動、シンガポールから研修船に乗り、ペナン島、プーケットに寄港して再びシンガポールに戻る4日間の航海となりました。

1. 渡航地視察

(1)シンガポール

ニューウォータービジターセンターという下水を真水に変えるプラント工場を視察しました。国土の狭いシンガポールでは、大きな川も溜池もないため、生活用水から工業用水にいたるまで、必要な水の90%以上を隣国のマレーシアから輸入しており、自国での供給率を上げることが、政府の重要課題となっているようです。

シンガポール国土の東側にはマリーナ・ベイ・サンズという東南アジア初の総合リゾート施設が建設中であり、その建設現場を視察しました。広大な敷地の中に、会議場や宴会施設、コンベンションや展示会場など最新の機能を備えた設備、さらにショッピングモール、ダイニング、ホテル、エンターテイメントやシンガポール初のカジノなども併せ持ち、完成後はシンガポールを象徴する施設となるのは間違いありません。シンガポールは1996年に経済協力開発機構(OECD)の途上国リストから外れ、現在では先進国として、ここ数年コンスタントに年6~9%の経済成長を続けています。実際に市内を歩いてみても、中心部の繁華街は日本で言う銀座・

渋谷・原宿の印象であり、人々のファッションや道行く自動車などを見ても日本とほとんど遜色ありません。この国のさらなる発展に疑いの余地がないこと

を肌で感じるとともに、昨今の日本の内政状況や社会状況を考えると、今のままではアジア諸国に追いつかれてしまうのではないかという危機感や焦りのようなものを覚えました。

(2)ペナン島

地形が亀の姿に似ているペナン島、上陸してすぐに異臭が鼻をつきました。海辺には税金のかからない水上家屋があり、生活排水を垂れ流していることが原因のようです。その一方で、中心部まで行くと高層ビルが建ち並ぶ近代的な街並みが現われ、海辺付近では見かけなかったスーツ姿のビジネスマンが目につきました。わずか半日の滞在で、港から街の中心部まで歩いただけですが、人々の大きな貧富の差を感じました。

(3)プーケット

世界的に有名なリゾートであるプーケット、その3kmにも渡る華やかで美しいビーチは、様々な国の観光客で賑わっていました。プーケット上陸にあたり、事前にツアーの方から、ものは定価で買わずに必ず値引き交渉するように言われていたのですが、ものによっては半値以下で購入できたものもあり、物価の安さが印象的でした。

2. 船内研修

今回の研修で乗船したのは、世界で3番目の大きさを誇るスーパースターヴァーゴという豪華客船でした。4日間にわたる航海という

ことで、船酔いを心配しましたが、今回航行したマラッカ海峡はもともと気候が安定していて波も穏やかであり、さらに船には揺れを抑える最新鋭の"スタビライザー"という装置が搭載されていて、ほとんど揺れを感じることはありませんでした。

船内では、管理監督者層と青年リーダー層に分かれ、個別研修テーマに沿って講義を受け、班ごとにディスカッション、発表を行いました。私は管理監督者層として本研修に参加させていただきましたが、今後、自分に求められる要素やスキルなどを体系的に整理することができた点において、大変意義のある内容であったと感じています。また、業種や立場の異なる各研修生が、それぞれの視点で述べる様々な意見や考え方に触れることができ、大変参考になりました。

・管理監督者層

テーマ1: 国際競争時代のマネジメント能力の開発

テーマ2: 人と組織を動かす能力の向上



スーパースターヴァーゴ
全長268.29m、総トン数76,800t、乗客定員5,960人



・青年リーダー層

テーマ3：グローバルリーダーとしての問題解決能力の向上

テーマ4：課題・問題解決の実践力アップ

・各層共通

テーマ5：“柔らかな”心と体の健康づくり

3. 委員会活動

研修参加者が全員所属する役割委員会ですが、私は、研修終了後に主催事務局が制作する報告書冊子の企画ならびに資料や写真の収集、原稿依頼などを行う報告書委員会に所属し、委員長を務めさせていただきました。

委員会活動は、あらかじめ定められている9日間のスケジュールの合間を縫って、活動時間の調整や活動場所の確保も含めてすべてを自分たちで運営しなければならず、特に船内では、船の大きさもさることながら、この4日間では回りきれないほどのグルメやエンターテイメント施設があり、広い船内に散らばった15人のメンバーの招集や連絡事項の伝達は、船上という慣れない空間、そして携帯電話が使えない状況において困難を極めました。

委員会活動をとおして、予期せぬ事態が発生した場合の臨機応変な対応や判断、限られた時間の有効活用、隣接組織との連

携、そして、“長”として組織全体を同じベクトルに導く難しさなど、実際の組織運営そのものを疑似体験できたのは、大変良い経験となり、大きな収穫であったと思います。

4. 研修を振り返って

私自身、海外に出るのが初めてということもあり、大きな不安と小さな期待を抱いての研修参加でしたが、振り返りますと、初めての土地、出会って間もない仲間との共同生活・班活動・委員会活動、慣れない船上生活、講師の方々による講義など、「1秒たりとも無駄な時間はなかった」そう思えるほど密度の高い充実した9日間でした。研修で得たものを今後の業務に生かし、大学の発展のため業務に邁進していきたいと思えます。

最後に、このような貴重な機会を与えてくださいましたeDCグループ、そして研修期間中に業務をフォローしていただいた広報室の皆様に深く感謝いたします。



学生相談室 について

学生相談室は身近な相談相手です

皆さんのきょうだいや両親、友達や先輩が悩みごとの相談に乗ってくれるでしょう。それでも解決しないとき・・・

臨床心理士と教職員が、学生生活のさまざまな悩みを一緒に考え、あなたをサポートします。

たとえばこんな悩み・・・

- ◆眠れない、何もやる気がしない。
- ◆友達が作れない。
- ◆勉強のことで困っている。

相談した内容については秘密を守ります。

学生相談室の利用方法

- ◆相談希望者は直接学生相談室あるいは相談担当者を訪ねてください。
- ◆相談を継続する場合、2回目以降は時間を予約して頂くことがあります。
- ◆相談室前に置いてある「予約カード」で相談の予約ができます。
- ◆相談室の利用時間は
<http://www.do-johodai.ac.jp/campus/soudan.html>
で確認できます。

学生相談室への問い合わせ

- ◆学生サポートセンター
TEL (011)385-4416
こちらの電話では、具体的な相談には応じられません。

本大学が開学したときの情報学科一期生からゼミを担当しています。本学が開学した平成元年の頃は、プログラム言語としてはC言語が盛んに使われ始め、現在では広く普及しているLANが珍しい頃です。当時のゼミのテーマは、「並列処理あるいは分散処理プログラム」などが主でした。その後、平成7年にJava言語が登場し、中岡ゼミでも10月からJavaの学習を始め、数値地図表示処理アプレットを世界に先駆けて開発し、インターネット上で公開しました。全世界から多くのアクセスがあり、新聞や雑誌などで優秀アプレットとして紹介されました。以来、ゼミ学生はJava言語を利用して様々なアプリケーションを開発し、学会などで多くの発表を行ってきました。

その後、インターネットの本格的な普及にしたがい、ゼミテーマの軸足もインターネット関連技術に移り、「Webアプリケーション開発」「ネットワーク技術、管理」「セキュリティ」に移ってきています。さらに最近では、「組み込みソフトウェアの開発」などハードウェアに近い分野のテ

マもあります。テーマは原則として学生が自ら見つけることになっているので、結果としてバラエティに富んだものとなります。中岡ゼミでは、どのようなテーマであっても、「もの作り」を行うことによって、真に生きた知識、技術を身につけることを目的としています。



中岡ゼミ

担任 中岡快二郎

高瀬ゼミ

担任 高瀬 央

経営ネットワーク学科の専門ゼミのひとつであるこのゼミは、会計(学)をその研究対象としている。

会計(学)は、一般的なイメージとしてはすぐれて実践的なもの(を学ぶ分野)であり、近年はビジネスにおける基礎教養のひとつとして脚光を浴びている(英語、コンピュータ、会計の三つのスキルをもって、「現代企業人の三種の神器」とする向きもある(そのよしあしはさておく))。にもかかわらず、いざこれを勉強しようとする、そのとっつきにくさ、(もっといってしまえば)つまらなさに音をあげる、というのが大方のようである。

事程さように会計(学)が一般に身近ではない、おもしろいと思われたいのはなぜなのか、その理由を端的に表現している著書【友岡賛『会計の時代だ!』筑摩書房(ちくま新書)】がある。

同書曰く、「たとえば経済学とか経営学とかいった学問のばあい、それらの対象は経済活動ないし経営活動といった、いわば世のなかの動きそのものだが、会計学のばあいの対象は、企業の経営

活動を表現してひとに伝える行為、であって、企業の経営活動という世のなかの動きそのものではない」(P.203)。「譬喩的な言い様をすれば、会計は単なるカネ勘定であって、カネもうけ(経営活動)ではない」(P.204、傍点は原文)。「問題(?)はなにか?といえば、ここで本当におもしろいのは、カネもうけ……であってカネ勘定それ自体がおもしろいのではない、ということである」(P.203)。

本学にあっても、本質を見抜く学生が多いのか(?)、‘カネもうけ’よりも(あるいはこれと同じ程度)‘カネ勘定’に興味をもってくれる学生は極めて少数派である(教える側に問題があるのでは?といった疑問は当然(?)さておく)。ただ、しかし、ありがたくも、昨年度(新4年生)7名、今年度(新3年生)は8名の学生がこのゼミの門を叩いてくれている。

ゼミ

紹介

北海道情報大学 Field Hockey サークル



平成20年2月26日放送
NHK総合テレビ「ほっからんど北海道」より

修士1年 石井 真人 唐澤 健佑	2年 林 雅和 星 健太郎 高橋 達也
4年 砂子 幹樹 須藤 一弘 高橋 美波 井上 亜利紗	1年 山下 揮久 高尾 朋宏 守屋 和樹 藤川 聖太 野戸 翔太 角鹿 郁実 長南 桂 大森 美香
3年 執行 智也 島田 亮	

顧問 齋藤 一 准教授

Field Hockey



フィールドホッケーとは？

○皆さんはフィールドホッケー（正式名称ホッケー）という競技をご存知でしょうか？ ホッケーといえば、氷上で行われるアイスホッケーを連想する人が多いかもしれませんが、フィールドホッケーとは、人工芝のグラウンドで、スティックとボール（野球の硬球ような大きさ）を用いて、サッカーのように11人で行う競技です。

○北京オリンピックでは、日本女子代表チーム「さくら Japan」が前大会に引き続いて出場することが決まっています。



僕らの活動

○私たちは、昨年5月頃から活動を開始し、11月に正式にサークルとして認可されました。現在、メンバーは19名で、フットサルのような少人数によるミニゲームを中心に練習をしています。今後、11人制で行われる公式戦への出場と、本学の体育館の広さでもできるミニミニホッケーの大会を開催することが目標です。

○私たちは、これからホッケーを通して他大学や社会人との交流を深めていきたいと考えています。



○先日、NHK 総合テレビ「ほっからんど北海道」、および、NHK ラジオ「フレッシュサウンド北海道・フレッシュキャンパスDJ」において、私たちの活動を紹介して頂きました。ご視聴、頂けましたでしょうか？

○番組でも紹介した通り、私たちは、大学生になってから、初めてホッケーをプレーした人がほとんどです。これから練習を積み重ねて他大学にも通用するような実力を持ったサークルにしたいと思います。



顧問 齋藤 一 准教授

Field Hockey サークルに期待すること

私自身、中学生の頃から親しんでいるホッケー競技ですが、情報大でサークルを作ることになるとは思っても見ませんでした。一昨年、砂子君がホッケー経験者と知り、空き時間に、パスやドリブルなど、簡単な練習というか遊びをするようになりました。その後、練習をする仲間が1人増え、2人増え、気がつくと、現在の19名のメンバーになっていました。

学生達には、ホッケーを純粋に楽しんでもらいたいと思っています。



キャプテン 砂子 幹樹

Field Hockey サークル 後輩たちに向けて

最初は、齋藤先生と軽く遊んでいたホッケーも、今では19名のメンバーに増え楽しく練習をできるまでになりました。短い時間ではありましたがメンバーと仲良く話をしたり、練習ができたことを思うと卒業することがとても淋しく感じます。

これからは、新しいキャプテン、副キャプテンに期待します。Field Hockey サークルのモットーである「楽しくホッケーをする」を忘れずに、来年ももっとメンバーが増えて、楽しくホッケーができるサークルを目指してほしいと思います。

メンバー募集！

Field Hockey サークルに興味のある方は、見学に来てください。

<問い合わせ先>

- ・学生サポートセンター
- ・122 研究室（顧問 齋藤 一）

<ページの制作>

文章構成: システム情報学科1年 山下 揮久
レイアウト: 情報メディア学科2年 林 雅和
監修: 准教授 齋藤 一
准教授 安田 光孝

平成19年度 公開講座終了報告

平成19年度の北海道情報大学公開講座が終了しましたので、ご報告します。

1. 平成19年度 講座実施状況

平成19年度は全32講座を実施し、次の通りの参加人数となりました。なお、本年度も全ての講座を無料で実施しました。

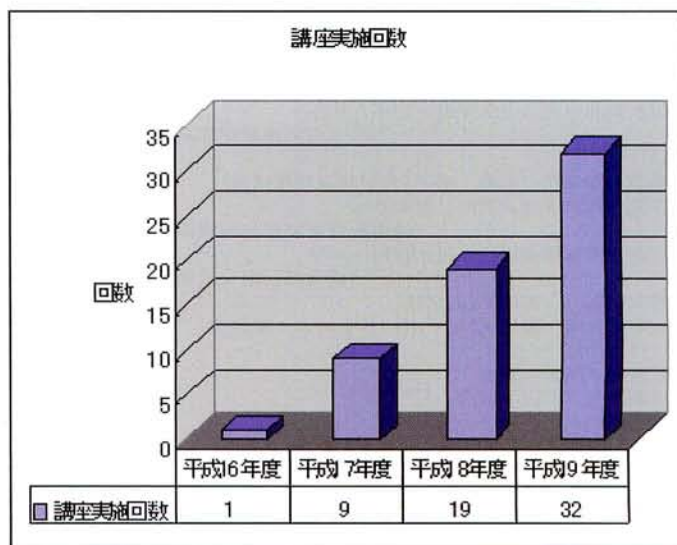
No	講座名	参加人数
1	脱初級！Word&Excel～「使える」機能の紹介～	一般25
2	株式投資戦略	一般39
3	生活習慣病とホルモン –インスリンの発見から最新情報まで–	一般17
4	体験！デジタルビデオ編集	一般 9
5	中級者向け ひとつ上を行くHomePageの作り方～XHTML+CSS～	一般26
6	北の大地に生きた女性医師たち –荻野吟子らの足跡をたどる–	一般21
7	啄木と小説 –北海道時代とその前後–	一般26
8	コンビニエンスストア(CVS)と情報ネットワークとの関係	学生のみ
9	特別講演会 「情報とは何か…知ること」 学生＋一般	一般46
10	デジタルカメラの基礎①	一般37
11	日本経済と外交の関係	学生＋一般36
12	フォトショップ始めの一步①	一般28
13	ITIL導入によるNetSystemの運用管理	学生のみ
14	特別講演会「国際化時代に望まれる人材」	学生＋一般59
15	高齢化と認知症について –診断と対策–	一般37
16	コンピュータで暑中見舞いを作ろう	一般14
17	ゆっくりのんびりWORDに挑戦	一般29
18	プログラミング入門–JavaScriptを通して–	一般 7
19	骨粗しょう症について学ぼう –診断と予防について–	一般25
20	旅行で使える中国語	一般35
21	デジタルカメラの基礎②	一般15
22	特別講演「IASBの最近の動向–コンパジェンスの現状と展望を中心に–」	学生＋一般53
23	国際理解シリーズ「時空の旅人第3回–考古学の発掘調査から世界を見るI–」	学生のみ
24	フォトショップ始めの一步②	一般25
25	診療データ活用–DPCの基本的な考え方–/病院運用におけるデータ活用の論点	学生のみ
26	免疫と病気 –体をまもる仕組みと病気について–	一般36
27	コンピュータで年賀状を作ろう①	一般19
28	コンピュータで年賀状を作ろう②	一般18
29	コンピュータで年賀状を作ろう③	一般22
30	国際理解シリーズ「時空の旅人第4回 –考古学の発掘調査から世界を見るII–」	一般48
31	肥満と病気 –メタボリックシンドロームを中心に–	一般32
32	教えるときにMacを使うと、ここが嬉しい	一般15
	合計	799名

2. これまでの推移

公開講座を開始した平成16年度から平成19年度までの推移をまとめました。

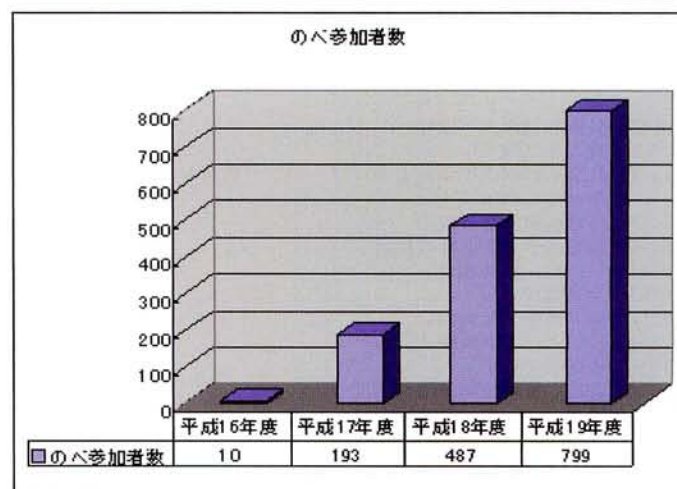
(1) 実施回数

平成16年度に1回の講座で開始した本学公開講座も、平成19年度は32回を数えるまでになりました。この間、内容にも充実がみられ、コンピュータ実習系の講座は中級までを網羅し、また一般教育関連の講座だけではなく、経営学関連の講座、国際理解に関する講座なども実施してきました。さらに昨年度からは医療関連の講座も実施され、充実した内容を提供しています。



(2) 参加者数

平成16年度に10名の参加者に始まりましたが、平成19年度は799名の参加者を数えるまでになりました。本年度は年間10回以上参加して下さるリピーターの方もおられました。



(3) 会場

実施会場は講座で利用する機材の関係などで、本学と札幌サテライトを使い分けています。札幌サテライトは北海道庁裏という恵まれた立地にあるので、一般講演型の講座で多く利用しています。コンピュータ実習などの講座の多くは機材とソフトの充実した本学で行っています。

3. 今後の方針

平成20年度は、コンピュータ実習関連の講座で、いよいよ上級の講座を実施する予定です。中級講座への要望も高いので、その充実も考えていきます。また、生涯教育の観点からだけでなく、現役の社会人教育や小中学生・高校生も視野に入れて実施計画を立てる予定で、今後も市民の皆様の要望に応え、期待される講座となるよう、心がけていきたいと思えます。新年度、気持ちも新たにますます充実する本学公開講座にご期待下さい。

(総務課)

◆◆教職員の動向◆◆

<教員>

退職(3月31日付)

講師/五十嵐 哲也(医療情報学科)
准教授/大川原 辰也(医療情報学科)
教授/新保 勝(医療情報学科)
教授/浪田 克之介(医療情報学科)
特任教授/藤家 壯一(経営ネットワーク学科)

<職員>

採用(3月1日付)

学生サポートセンター事務室課長/今長 豊

退職

(12月31日付)

会計課長(兼)大学院課長/山地 博之

(1月31日付)

学生サポートセンター事務室課長/山田 順一

(3月31日付)

学生サポートセンター事務室長/黒田 修司

配置換

(12月1日付)

会計課経理係長/河村 信司

(通信教育部事務部学生係長)

通信教育部事務部学生係長/岩本 和生

(会計課経理係長)

(3月1日付)

総務課人事係長/山隈 治子(大学院課教務係長)

大学院課教務係長/高田 かおり

(通信教育部事務部庶務係長)

通信教育部事務部庶務係長/吉村 美穂

(総務課企画交流係長)

教務課/堀川 美代子(入試課)

入試課/對馬 聡子(学生サポートセンター事務室)

兼務(1月1日付)

会計課長/横田 敏雄

大学院課長/吉田 嗣治

◆◆主要行事(11月21日~3月31日)◆◆

◇法人本部◇

1月24日(木)~1月25日(金)

監査法人トーマツ「平成19年度期中監査」

2月 7日(木) 労使協議会

28日(木) 理事会

3月 5日(水)~3月 7日(金)

監査法人トーマツ「平成19年度期末監査」

26日(水) 理事会

◇大 学◇

11月25日 公募制推薦入学試験

12月 8日 編入学試験

11日 北海道野幌高等学校とのeラーニング教材共同
開発協定調印式

14日 経営情報学部教授会

21日 情報メディア学部教授会

23日~1月6日 冬期休業

27日 全学教授会

1月11日 経営情報学部教授会

13日 特別A〇入学試験

15日 後期授業終了

17日~26日 後期定期試験

18日 情報メディア学部教授会

19日~20日 大学入試センター試験

25日 全学教授会

2月 2日~3日 一般1期入学試験

4日~6日 追試験期間

8日 経営情報学部教授会

14日~16日 再試験期間

15日 情報メディア学部教授会

22日 全学教授会

28日 春季FD研究会

3月 3日 臨時経営情報学部教授会

臨時情報メディア学部教授会

5日 現代G P成果報告フォーラム

6日 企業説明会

11日 経営情報学部教授会

情報メディア学部教授会

14日 学位記授与式・卒業祝賀会

19日 一般2期入学試験

21日 現代G P著作権特別講演会

25日 特別A〇入学試験

28日 全学教授会

<公開講座>

11月20日 「免疫と病気 一体をまもる仕組みと病気について」

12月 8日~19日 「コンピュータで年賀状を作ろう①~③」

1月 7日 「国際理解シリーズ」時空の旅人第4回

—考古学の発掘調査から世界を見るII—

3月18日 「教えるときにMacを使うと、ここが嬉しい

~プログラミング環境としてのMac:概要編~」

<来学者>

2月15日 常磐大学 4名

2月25日 関東学院大学 4名

◇大 学 院◇

1月21日(月)~1月31日(木)

大学院入試(2次募集)出願期間

22日(火) 研究科委員会

30日(水)~1月31日(木) 学位論文等事前審査会

2月 9日(土) 大学院入試(2次募集)

22日(金) 学位論文等公開発表会

28日(木) 研究科委員会

3月27日(木) 研究科委員会

◇通信教育部◇

12月20日(木) 鹿児島教育センター 大学見学

◆◆広報活動◆◆

<通信教育部 入学説明会;本学独自>

12月:4会場(名古屋、本学、大阪、東京)

1月:1会場(福岡)

3月:2会場(東京、本学)

<通信教育部 合同入学説明会;私大通教主催>

2月:9会場(東京、仙台、名古屋(2)、大阪(2)、横浜、広島、福岡)

3月:4会場(東京、新潟、札幌(2))

<進学相談会>

11月:北海道 3会場(帯広、釧路、札幌)

群馬県 1会場(桐生)

12月:北海道 4会場(旭川、伊達、帯広、釧路)

東京都 1会場(蒲田)

1月:北海道 7会場(大樹、網走、枝幸、紋別、中標津、稚内、名寄)

2月:北海道 3会場(函館、江差、八雲)

3月:北海道 6会場(音更、旭川、室蘭、釧路、新札幌、苫小牧)

<高校内ガイダンス>

11月:北海道 6校(札幌白石高校、石狩翔陽高校、旭川大学高校、帯広
北高校、札幌拓北高校、札幌創成高校)12月:北海道 7校(札幌北斗高校、恵庭北高校、札幌月寒高校、札幌新
陽高校、札幌第一高校、岩内高校、富良野緑峰高校)2月:北海道 4校(愛別高校、白糠高校、札幌拓北高校、美深高校)
埼玉県 1校(東野高校)

3月:北海道 3校(札幌東豊高校、富良野高校、津別高校)

千葉県 2校(千葉黎明高校、敬愛学園高校)

神奈川県 1校(立花学園高校)

<高校訪問>

11月:北海道125校、青森県32校、東京都7校、群馬県1校、埼玉県5校、
神奈川県4校12月:北海道182校、岩手県30校、東京都10校、栃木県1校、埼玉県5校、
千葉県3校、神奈川県2校

1月:北海道1校、東京都4校、埼玉県6校、千葉県3校、神奈川県8校

2月:北海道119校、埼玉県5校、千葉県2校

3月:北海道133校、東京都5校、埼玉県2校、神奈川県1校

<特別A〇入試説明会>

12月 9日(日) 本学

<大学入試説明会>

1月11日(金) 本学

2月27日(水) 本学

28日(木) 本学

<オープンキャンパス>

3月23日(日) 本学

<広報室来学者>

12月 6日(木) 北広島西高校(大学見学会:学生19名)

2月28日(木) クラーク記念国際高校(大学見学会:学生37名)

3月 6日(木) 札幌東商業高校(教員2名)

編集後記

前号から学生が制作したページが登場しました。今号にもいくつか掲載されていますが、いかがでしたでしょうか? 学内ではこの他にも学生が参加する、イベント・制作物やコンテストなどが徐々に増えています。また、外部団体主催のコンテスト、YOSAKOIソーラン祭り、学会活動などでの学生の活躍も目に付くようになりました。学校が活気付きますし、何よりも本人の将来のために、今後も学生たちには大いに活躍してもらいたいです。(K)